

# 徳富蘇峰記念館

目録——(20)

## 海を渡った先覚者(二)

展示期間◇平成十五年一月六日〜十一月二十八日

### はじめに

今回も昨年にひき続き「海を渡った先覚者」(一)の展示です。「海を渡った体験を持った人」ということが展示書簡の共通項です。新聞記者、芸術家、宗教学家、医学者、文学者、科学者など、彼らの好奇心や向上心が、続々と外国に船出する原動力になったのでしょう。政府から命じられた留学生は目的と地位と金は最小限守られたいたでしょうが、開国したての日本が、けつして裕福でなかったことを覚えていなければならぬでしょう。個人の意志で海外で勉強したという、自己負担の人にとっては、苦しい空腹があったように感じられます。そのうえ外国で認められるにはまず十年の辛抱が必要であったようです。禅の普及に努めた鈴木大拙も、始めは出版社に勤め、十年後には、忍耐と努力が言葉の壁を克服し、自由に活躍をし、本を出版し、講演を行い、充実した世界人になつていったようです。海を渡った人たちは、海のかなたに何を見、何に驚き、何に感動し、何に恥じ、どんな日本の将来を描いていたのでしょうか。外国に行く前に、日本のことを学び、知識を深め、外国で対等に母国の歴史、文化を語り合えるほどの教養を身につけることが必要であったと思います。

明治二十一年、中江兆民の弟子酒井雄三郎は、農商務省からフランスの万国博覧会に派遣されます。酒井はフランス行きが決まると、食べるものも惜しんで金を貯め、フランス語をよりよく話せるように、フランス人と生活を共にし、「語学の修業極めて忙しく、丸で此頃は赤ん坊同様、其故乍句心外御不沙汰仕候」(明治二十年五月)と蘇峰に書いています。酒井のフランスからの書簡は、自分の目でみた新しい社会主義の様子を伝えています。自分の肌で欧州の動きを感じたい酒井にとって、時間は貴重なものでした。明治二十二年十二月パリから

の長文書簡の中に酒井を煩わした日本人のことが書いてあります。「福岡県人本城某と申者中江や先生(蘇峰)より小子の事を聞けりとして両度ほど寓所に尋ねきたれり。アメリカを経て来たりし由当国の有志家に交を結び日仏の交誼を温め政治文学商工の事業をも研究する目的とか。仏語はおろか外国語は一言も通せず金もなく」、あるものは勝海舟から贈られた肥前忠吉の名刀だけでした。酒井は男を助ける余裕もなく、旅費の残金で帰る事を勧告しましたが帰る事だけは承知せず、その夜仏人と喧嘩をし、小刀で切りつけ裁判所に廻され、酒井は裁判所に呼び出されました。このような迷惑をかける、可哀想な日本人も多くいたようです。

最近嬉しい事に、「同志社山脈—113人のプロフィール」(同志社山脈編集委員会編2003年)「新島襄と徳富蘇峰—熊本バンド、福沢諭吉、中江兆民をめぐって—」(本井康博著2002年3月)「日本女子大学学園事典—創立100年の軌跡—」(日本女子大学編2001年)「近現代日本女性人名事典」(近現代日本女性人名事典編集委員会編2001年)「創設期の同志社—卒業生たちの回想録—」(同志社史料資料室1986年)など、人の生き方を中心とした書籍が多く出版されました。これらの本は、いままでの人物事典に加えて、より人間味のある、立体的な人生が語られています。

特別展の展示書簡の外に蘇峰が明治29年から30年にかけて外遊した際に採集した葉っぱ、押し花帖を展示しました。トルストイを訪ねた蘇峰と深井英五が採集した楓の葉、羅馬の薔薇、奥都の葉、セントルック宮苑の葉、土耳其リザへの菊、エメルソン園の花などです。旅行中の蘇峰と深井の余裕のある雰囲気や伝わってくるようです。その他美術品は吉田初三郎の「阿蘇周辺」の鳥瞰図、川端龍子の大作「蘇峰立像」、平福百穂の「牛」「白梅」などが展示してあります。

最後に伊藤整の『日本文壇史』第二の「はしがき」を引用させていただきます。「ある時代の文士や思想家や政治家の行動が、みなつながりのあるものと考へ、そのつながりや関係や影響を明らかにすることに全力をつくした」。伊藤整の文壇史の面白さは伊藤氏の言われるように、人と人とのつながりの妙を大切にしている所にあると思います。私も何も書簡を基に、蘇峰とのつながりの妙を見ていきたいと思っています。

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
暁鳥 敏 (非無) 14通	1877～1954 明治10～昭和29 石川県	明治・大正・昭和の真宗大谷派の僧。真宗大学で学ぶ。〈浩々洞〉同人となり、精神主義運動に参加。明治34雑誌「精神界」の発刊、編集。倫理を否定する大胆な発言をする。大正5〈浩々洞〉の解散で自坊に帰り、叢書「にはひ草」刊行。大正14インド佛跡巡拝、ヨーロッパ各地等を旅行。昭和4ハワイ・アメリカを講演旅行。多くの信者者をもった。同郷の島田清次郎が上京する前、一時暁鳥の所に入社したが、あまりの傲慢と行儀悪さにあきれたという。 〈展示書簡〉御高著「世界の二大詩人」到着いたし之又難有存じ候 この頃の日本の青年はボードレールやランボウに心うばはれる者多く刹那主義の浮浪根性にてふらふらしている事がなげかしく存候 ミルトンの如く感情も豊富で情意も健全に発達している詩人の誕生が望ましく候…四・五日中に涙骨翁「真溪淚骨」に逢って先生の御噂を申し上げ度いと楽しみ居候 (昭和24年1月6日付)	インド ハワイ アメリカ
芦田 均 1通	1887～1959 明治20～昭和34 京都	昭和期の外交官・法学者・ジャーナリスト・政治家。青年時代には谷崎潤一郎や和辻哲郎らと親交を深め文学に傾注。明治44東京帝国大学卒業後外交官としてベテルブルク、パリ、イスタンブル、ブリュッセルに赴任する。昭和7ブリュッセル赴任中、ベルギーの外務大臣に「日本が国際連盟の威信を傷つけるような行動をとるならば、ベルギーは対日政策を考慮せざるを得ない」と言われ、政治家への転身を決意。初当選を果たし、以来27年間、終生国会議員として活躍。昭和8ジャパン・タイムスの社長に就任。昭和23第47代内閣総理大臣就任。	ベテルブルク パリ イスタンブル ブリュッセル
安部 磯雄 1通	1865～1949 慶応1～昭和24 筑前(福岡県)	明治・大正・昭和期のキリスト教社会主義者。同志社卒。明治15新高襄から洗礼をうけ、明治24ハードフォード神学校留学。明治34片山潜・幸徳秋水・木下尚江らと社会民主党を結成したが即日禁止となった。日露戦争では非戦論を唱えた。早稲田大学野球部長。「野球の父」といわれた。	アメリカ
飯田 旗軒 (旗郎) 2通	1866～1938 慶応2～昭和13 江戸	フランス文学者。別号は梅廼舎(ウメノヤ) 文江・聴雨居士・眼花道人。西園寺の在仏時代からの友人。エミール=ゾラの作品を翻訳した。展示書簡は欧州から南米の途中中南アフリカケープヴェント島ワシントンヘッドよりワシントンの横顔に見える山の頂を写した絵葉書(大正15年8月16日付)	フランス アフリカ
池辺 三山 (吉太郎) (鉄崑崙) 9通	1864～1912 元治1～明治45 熊本県	明治時代のジャーナリスト。熊本藩士池辺吉十郎の子。慶応義塾。明治22東海散士とともに雑誌「経世評論」の編集にあたり、明治25細川護成に従いフランスに留学。日清戦争時に鉄崑崙名で「巴里通信」を新聞「日本」に掲載。明治29「大阪朝日新聞」に入り、翌年「東京日日新聞」主筆となる。陸羯南、蘇峰とともに明治の三大記者といわれる。漱石は文学に専心すべきか大学にとどまるべきかに迷った時、読売新聞社から主筆竹越与三郎、文芸記者正宗白鳥らが訪れて入社をすすめたが条件が折合わず、結局明治40東京朝日新聞社主筆池辺三山が来訪して説得にあたったのを機会に朝日入社を決意した。	フランス
岩波 茂雄 (楷傑荘) 3通	1881～1946 明治14～昭和21 長野県	大正・昭和期の出版人。岩波書店の創業者。東大学生の時から安倍能成と仲がよく、能成と共に夏目漱石の十弟子でもあった。東大で倫理学を学び、神田女学校の教師となる。大正2神田で古本屋を開き、古本の正札販売で注目を集めた。大正3出版にも手をひろげ、漱石の「こゝろ」を処女出版した。安倍能成が10年がかりで「岩波茂雄伝」を書いた。 〈展示書簡〉出版は重大なる社会貨務を負へる教育事業なるにも拘わらずやとすれば営利の具に供せらるる所有之候「当たる」「当たらぬ」という卑陋なる言葉が今も尚白登公然稠人廣座にて聞かるる如きは甚だ残念に候此の職業に於ては其の公共性に鑑み営利を以て第一とすることは差控ふべきかと存候 (昭和21年3月3日付 文化勲章受賞に際しての祝辞礼状印刷)	世界漫遊

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡航先
上杉 慎吉 3通	1878～1929 明治11～昭和4 福井県	明治・大正期の憲法学者。東大卒。ドイツ留学。帰国後東大教授。その学説は穂積八束の影響が強く、君主主義による絶対主義である。大正1「国体に関する異説」を発表し、美濃部達吉の〈天皇機関説〉を攻撃。天皇制絶対主義勢力とデモクラシー勢力のイデオロギー論争は学者にとどまらず社会運動にまで関与していった。 〈展示書簡〉「帝国大学ニ於て有志学生ヲシテ小銃射撃練習を為サシメルコトニ相成申候 益々来十日ヨリ相始申候 就而ハ過日希望学生ヲ召集」(大正5年1月5日付)	ドイツ
上田 万年 5通	1867～1937 慶応3～昭和12 江戸	明治・大正・昭和期の言語学者。文学博士。文部省専門学務長。円地文子の父。明治23ドイツ留学し、欧州の言語学を研究。帰国後東大教授。蘇峰の「国史に返れ」「国民小訓」を帝国読本に転載。蔵書は東洋文庫に入れる。国語調査委員会主査委員。 〈展示書簡〉「国語読本編纂に就いては御快諾を得、御文章三篇頂戴仕り難有存候」(大正8年5月5日付)	ドイツ
上塚 司 22通	熊本県	衆議院議員。高橋是清に私淑し大蔵大臣秘書官となる。アマゾン産社長。昭和5アマゾン開拓を目指す国土館高等拓殖学校を設立し校長となる。日本で一年、現地で一年実地訓練をし、人作りと事業を共に進める移民拓殖事業であった。神奈川県稲田登戸に新校舎を建設し、日本高等拓殖学校と改名。7回生を最後に閉校。卒業生は全部で約250人。(日経新聞コロナープラザル日系社会ニュース参照) 展示書簡はパリからの絵葉書「欧州ハ仕事上の用事を速々済まし引上げ帰国を急ぎウンとアマゾンの為に尽くします」(昭和7年1月1日付)、コルシカ島からの絵葉書も展示。	アマゾン フランス
牛稻 武彦 1通		アフリカのダーバンからの絵葉書「猛獣や映画にて見し其の土地に遂に来れり」	アフリカ
内田 良平 4通	1874～1937 明治7～昭和12 福岡県	明治・大正・昭和期の右翼運動指導者。玄洋社幹部内田五郎の三男。若くして大陸進出に望みを抱き、明治27東学党応援のため、朝鮮にわたる。三国干渉後対露報復のため、ウラジオストックへ渡り、シベリアを横断。官崎滔天の紹介で孫文に会い、援助を約束した。明治34大アジア主義と天皇主義を標榜して〈黒龍会〉を結成。昭和1加藤高明首相暗殺未遂事件で入獄。昭和6大日本生産党を結成し総裁、滿蒙独立運動を推進した。 〈展示書簡〉「国体本義」此度以御蔭刊行の運びと相成候段難有御例申上候(昭和6年4月20日付)	中国 シベリア
江上 志馬雄 5通		三井銀行大阪支店 大江義塾生。展示書簡は昭和14年蘇峰77歳の御祝に送られたもの。イラン国最高峰デマバンド(1万8700尺)の写真葉書。	イラン
江藤 基三郎 4通		ニューヨークからの絵葉書(明治45年5月30日付)	アメリカ
江藤 哲蔵 3通	1958～1947 安政5～昭和22 岐阜県	原敬内閣時の政友会幹事長。展示絵葉書3通 (1) ロンドンからの絵葉書は、野田大塊が米国へ向かうため、ロンドンのユーストン停車場で待っている様子を写真に撮った葉書 (2) アメリカロングビーチからの絵葉書は明治42年5月6日付のもの、水着が長い洋服でおもしろい (3) ドイツフランクフルトゲーテハウスからの絵葉書。	ドイツ ヨーロッパ
大島 健一 3通	1858～1947 安政5～昭和22 岐阜県	大正・昭和期の陸軍軍人(中将)。陸軍中将大島浩の父。陸士教官。ドイツ留学。大正2陸軍中将。第2次大隈重信内閣の陸相となり、寺内正毅内閣にも留任。第1次大戦中の軍政を指導。大正7青島守備軍司令官となる。大正9貴院議員となり、昭和15-20枢密顧問官をつとめた。 〈展示書簡〉「御北堂様 長逝の由 承知痛惜の至 御一門の御哀悼奉拝察居候」(大正8年2月27日付) 蘇峰の母久子の逝去の際の弔辞。	ドイツ ヨーロッパ

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
大島 浩 2通	1886～1975 明治19～昭和50 岐阜県	昭和期の陸軍軍人(中将)。陸軍中将大島健一の長男。陸大。昭和9ドイツ大使館付武官となり、ベルリン駐在中のナチスとの接触を深め、外務省とは独自に軍部外交を進め、昭和11の日独防共協定の推進者となる。昭和13陸軍中将に進み、ドイツ大使に任ぜられる。この間、ドイツ側のリップントロップ外相と接近し、防共協定を強化するため日・独・伊の三国同盟を結び、枢軸外交を強めるために画策。昭和14独ソ不可侵条約が締結されて三国同盟問題が一時中断すると、大使を辞任。昭和15末再び大使として赴任し、三国の軍事同盟を実現するために努力。一貫して親独政策を主張した。敗戦後、極東裁判A級戦犯として終身刑。昭和30減刑され出獄した。 〈展示書簡〉御高見日々紙上ニテ拝読 意ヲ強ウ致居候 欧州ハ最早大部分独ノ制覇下ニ有之新秩序建設着々準備中ニテ東亞ノ事態ヲ願ミ誠に寒心に堪エサルモアリ候(昭和16年5月2日付)	ドイツ
香川 悦次 (静処) 7通	1924(大正13)没 香川県	明治時代のジャーナリスト。明治25東京法学校卒。中央政社幹事をへて雑誌「日本人」を主幹。その後「万朝報」「やまと新聞」で記者として活躍。明治31中国を視察し、「支那案内記」を著す。南支那革命運動に参加。 〈展示書簡〉古き本に誤字などあるに気付かず(但し木版ノ古書也)漫説過したる次第にて坩飯ハ坩飯にて碗飯なりし由にて失笑致居候 先生並に高橋君[高橋源一郎]之御手数を煩ハシ居候事は謹て奉感謝候(大正12年2月3日付)	中国
柏井 園 10通	1870～1920 明治3～大正9 高知県	明治・大正期の神学者・牧師。同志社。植村正久の推薦で明治学院東京神学校の教授となる。日本基督教青年会主事もつとめ、「開拓者」「文明評論」の刊行にも係わる。東京神学校での講義をまとめた「基督教史」(大正3)はわが国最初の包括的キリスト教史である。 〈展示書簡〉ニューヨークのユニオン神学校に入り健康にて暮居候 昨十二月十九日ブルークリン橋の上に新しき大橋の工事落成して開通式を行ひ可杜観を加へ申候 日露間の戦争も益々切迫したる様子にて…世界の注意と同情と我国民に集まる時代に逢ひ対すとて愉快に不耐(明治37年1月3日付 ニューヨークより)	アメリカ
加藤 拓川 (恒忠) 6通	1859～1923 安政6～大正12 伊予(愛媛県)	明治・大正の外交官。政治家。正岡子規の叔父。中江兆民の家塾、外国語学校、司法省法律学校に学び明治16フランスに留学、パリ法科大学に学んだ。明治19帰朝と共にフランス公使館付となり、明治35特命全権公使に任じられた。退職後は松山市長となる。子規を司法省法律学校で同期だった陸羯南に紹介した。子規はフランス大使館に在任中の叔父加藤拓川の写真を見て花の都パリへのあこがれと想像を俳句に詠んだ。「ふらんすに夏瘦せなんどなかるべし」子規	フランス
金栗 四三 1通	1891～1983 明治24～昭和58 熊本県	明治・大正・昭和のマラソン選手・指導者。日本最初のオリンピック選手。明治45高師在学中、第5回オリンピック(ストックホルム)に三島彦彦とともに参加。マラソンに出場したが、疲労して途中棄権。これを機に日本のマラソン振興を決意。第7回(アントワープ)、第8回(パリ)に連続参加。	ストックホルム パリ アントワープ
金子 喜一 1通	1875～1909 明治9～明治42 神奈川県	明治時代の社会主義者。蘇峰の書生となり文学を学ぶ。樋口一葉、若松賤子らと知り合う。明治32文学者を志して渡米、シカゴ大学に学ぶ。明治36年アメリカ社会民主党に入党。明治37「万朝報」週刊・日刊「平民新聞」「家庭雑誌」などに社会主義の主張を寄稿。シカゴ社会党の機関紙の記者となり同志のジョセフィン=コンガーと結婚。明治42病氣治療のため帰国。有島武郎の「迷路」に出てくる、社会主義者Kは金子がモデルとされる。著書「海外より見たる社会問題」。展示書簡は、ニューヨークブルックリンからの賀状(明治36年1月1日付)	アメリカ

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
金子 真成 1通		アメリカ サンフランシスコ リバーサイドから大きなオレンジが2個描かれた絵葉書(明治42年10月28日付)	アメリカ
鹿子木 貞信 15通	1884~1949 明治17~昭和24 東京	明治・大正・昭和期の哲学者。旧佐賀藩士の子。海軍を中尉で退職。哲学を専攻し、慶応義塾教授、のちヨーロッパ留学。大正15九大教授の後、昭和2ベルリン大学客員教授として、日本学講座を担当。昭和16ナチスドイツに招かれて〈皇学〉を講じた。日中戦争初期には現地で思想工作に従事。太平洋戦争中には、言論報国会専務理事兼事務局長。蘇峰と遠縁。展示書簡は明治40年のアメリカからの絵葉書3通「千代の栄え 愛しまつる 老師の前 いやましに 豊かならんを祈りまつる 遠き北米の空より 鹿子木貞信一千九百七年クリスマス」	ヨーロッパ ドイツ
鹿子木 孟郎 (不倒) 5通	1874~1941 明治7~昭和16 岡山県	明治・大正・昭和期の洋画家。明治25小山正太郎の不同舎に入り、のち渡欧。パリでジャン=ポール=ローランスの薫陶をうけた。浅井忠らと関西美術院を創立。肖像画を得意とした。吉田初三郎の師	パリ ヨーロッパ
川村 清雄 1通	1852~1934 嘉永5~昭和9 江戸	明治時代の洋画家。田能村直入に南画、のち川上冬崖に洋画を学ぶ。明治3渡米。米国でははしかに思った津田梅子の世話をした。イタリアに移り、ヴェネチア美術学校に入る。明治14帰国し家塾を開く。明るい色調を特色としたが、晩年は日本画風の表現に傾く。「少女像」「虫干図」「福沢諭吉」の肖像画など。清雄の妹は哲学者・教育者の外山正一の妻となる。 〈展示書簡〉 扱永ラク御配慮ニ預り候 明治神宮奉賛会壁画週日一先づ完成上納候間御安心賜り度 付イテハ聊カ御参考迄ニ友人相認メ候 別紙略解相添へ御送候 右不取敢御詫ビ方々御挨拶申述如斯候(昭和6年11月5日付)	アメリカ イタリア フランス
川村 吾蔵 8通	1884~1950 明治17~昭和25 長野県	彫塑家。米国で才能を評価されながら、国内ではあまり知られていない。明治37、20歳の時渡米画商の店を手伝いながら、ボストン市立ハイスクール入学し英語を学ぶ。明治40サムエル・モールズ(モールズ信号の発明者)設立のペーン教授(女史)のスタジオに住込み、エンラージング・ミシン(立体拡大機)の独創的な工夫・改良をし、後に吾蔵の大きな財産となる。ニューヨーク市立ナショナルアカデミー・デザイン学校入学。明治42渡仏。ルーブル博物館に通い、テッサンに励む。フランス国立美術学校エコール・デ・ボザール入学。ロダンに助手になることを勧誘されるが断る。パリにきていた島崎藤村と出会い、フランス南部の町への疎開に助力する。野口英世とも交友。ニューヨーク市立図書館入口前〈美と哲学像〉など。展示中の「徳富蘇峰胸像(和服スタイル)」は昭和16年制作	アメリカ フランス
河上 清 1通	1873~1949 明治6~昭和24 山形県	明治・大正・昭和期の評論家・新聞記者。国民英学校、慶應義塾に学ぶ。22歳頃黒岩涙香に認められて『万朝報』へ。内村鑑三、幸徳秋水、内藤湖南などそうとうたる執筆人に混ざって健筆をふるう。社会主義に共鳴し、片山潜・安部磯雄らとともに明治33社会主義協会、明治34社会民主党の創立に参加。同年7月自由の天地をもとめて渡米。渡航に際して、『万朝報』を通じて紹介してもらった後藤新平から300円の援助があった。明治39秋からニューヨーク・タイムスの書評欄に定期的に登場。以来国際問題評論家として、また「時事新報」「毎日新聞」特派員として活躍。日米双方にむけて戦争を回避するためにペンを振るうが対米開戦の年昭和16年にはペンを折った。ワシントンで死去。 〈展示書簡〉「東日」にて拙著「JAPAN SPEAKS」に御高評拜見致し、二週間で出来た原稿なれば欠点だらけなる事ハと、小生も十分自覚致居候。米国をもっと強くやっつけるという御教示一応最もに候へども米国の読者及び聴衆は喧嘩腰の議論を喜ばざる傾向あり。封入のアトランティック評論来月号に出すべき拙稿は此の読者心理に適合せるやう面白おかしく書いたつもりに御座候 御笑覧被下度候(昭和7年5月15日付ワシントンより)	アメリカ

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
岸倉 松 1通		シンガポールから植物園の絵葉書(明治39年11月19日付)	シンガポール
菊池 大麓 7通	1855~1917 安政2~大正6 江戸	明治時代の数学者・教育行政家。蘭学者荻作秋坪の次男。菊池氏を継ぐ。ケンブリッジ大。慶応1幕命によりイギリスに留学。のち東京開成学校(東大)で学ぶ。明治3よりケンブリッジ大で数学を研究。明治10帰国。明治14東大数学部を創設。わが国数学教育の振興に大きな足跡を残し「初等幾何学教科書」は広く長く使われた。日本標準時の建議者。明治31東大総長。明治34桂内閣の文相。高等教育制度の改革に努力。明治36の専門学校令は私学の大学昇格の基礎となった。帝国学士院長。蘇峰への明治34年10月17日付の書簡で「小生過日より国民新聞愛読致来居候処 昨日「みだれあし」と題する小説を家庭にて読候には甚だ有害のものと存候 右の如きもの尚続載相成りに於いては不得已御断申すことに相成り、甚だ残念に存じ候」と伝えている。文学を数学で割り切ることはできないであろう。明治35年2月8日、蘇峰は「徳富猪一郎 国語調査委員囑託ヲ解ク 文部省」という通知を受け取った。封筒は持参されたくし切手なしで、菊池大麓とある。	イギリス
岸本 能武多 1通	1865~1928 慶應1~昭和3 岡山県	明治・大正期の宗教学者・社会学者。同志社神学科卒業後、アメリカのハーバード大学留学。神学部から大学院に進み、明治27帰国。アメリカ社会学をわが国に移入。明治29姉崎正治と共に比較宗教学会を設立「六合雑誌」の編集委員・主筆となる。明35早稲田大学教授となる。明治40からは日本女子大学等で英語・英文法を教える。 (展示書簡) Dr. Abbotへ蘇峰と深井英五を紹介する英文の手紙(明治29年5月17日付)	アメリカ
城戸 元亮 145通	1881~1966 明治14~昭和41 熊本県	ジャーナリスト。「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」。ドイツ留学。大正15年大正天皇崩御に際し、新しい年号は「光文」に決定していたが、公式発表の前に「東京日日新聞」で報じられてしまったため、急遽、第2候補だった「昭和」に変更された「光文」のスクープは誤報とされ城戸元亮主幹は辞職した。展示書簡はロンドンよりハイドパークの絵葉書(昭和2年9月25日付)	ドイツ
木村 毅 21通	1894~1979 明治27~昭和54 岡山県	大正・昭和期の評論家・明治文化研究家。早大。陸文館編集部に入り、のち春秋社に転じ、やがて退社して明治文学の研究に入る。大正12藤森成吉の推薦で日本フェビアン協会の会員となり、また日本労農党に加入。昭和3~5欧州に遊学。昭和6渡米。帰国後明治大講師をへて「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」社友となる。戦後は自由出版協会会長、東京都参与に就任、早大講師をつとめた。明治文化・文学研究のほか大衆文学の理論や英米文学の紹介・翻訳などもある。文博。著書「大衆文学十六講」1933 (展示書簡) 左伝は夏目漱石も谷崎潤一郎氏もその他の先輩も文章の簡勁なことをのみ述べているのを少年時代から記憶していましたが、成程先生のようによく読みこなせばそうした史家としてのいろいろな態度まで分るものかと今更のように思いました(昭和14年9月12日付)	欧州 アメリカ
木村 熊二 1通	1845~1927 弘化2~昭和2 但馬(兵庫県)	明治期の教育家・宗教家。昌平黉に学び、明治3渡米。神学を学び、牧師の資格を得て帰国。明治18妻鏡とともに明治女学校設立に参加し、初代学校長となり、のち信州に小諸義塾を開く	アメリカ
木村 栄 2通	1870~1943 明治3~昭和18 石川県	明治・大正・昭和期の天文学者。東大卒。明治32万国測地学協会の要請で水沢に創立された緯度観測所初代所長。明治31ドイツ、シュトゥットガルトで開かれた万国測地学協会総会に田中館愛橘に伴われて出席。ポツダムで中央局で観測する恒星の選定に提言して認められる。明治35緯度変化の変動成分X、Yのほか第3成分Zを発見(Z項または木村項)これにより明治44帝国学士院恩賜賞受賞。大正11から昭和12まで水沢の万国緯度観測中央局局長。昭和12第1回文化勲章受賞(蘇峰は昭和18年に受賞)	ドイツ

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡航先
清 沢 冽 1通	1890～1945 明治23～昭和20 長野県	大正・昭和期の評論家・ジャーナリスト。代表作『暗黒日記』は昭和29年に東洋経済新報社から出版され、昭和19年4月21日の項の「日本には不敬罪がいくつもある。1、皇室 2、東条 3、軍部 4、徳富蘇峰・・・これらについては、いっさいの批判は許されない」という箇所が、研究者、小説家にしばしば引用されている。蘇峰への書簡は、『暗黒日記』より約18年前の大正15年12月21日付の1通である。「拝啓まだ親しく御教へを受けたことございませんのに、突然お手紙を差し上げます御無礼をお許し下さい。小生事、今回、婦人問題に関する文章を纏めまして一冊の本に致しました。題名を「モダン・ガール」と命じましたのは、本屋の希望に出たもので、時勢を追うものとして、或は御批難の筋もあらうかと存じます。一部、別封にて御高覧に供へますが、御高評を得ば、これにまさる光栄はございません。自から御紹介申上ぐるの非礼をお許し下さいますならば、私は中外商業新報に席をおくもので、先生の御高論は、平正愛読して居るものでございます。右お願い申し上げたく、勿々頓首 十二月二十一日 神奈川県鶴見町花園内 清沢冽 徳富先生」	イギリス
久 布 白 落実 36通	1882～1972 明治15～昭和47 熊本県	大正・昭和期のキリスト教婦人運動家。日本基督教婦人矯風会名誉会頭。父大久保真次郎は新島襄門下の牧師。母音羽は徳富蘇峰の姉。女子学院高等部・バークレー太平洋神学校(アメリカ)。明治35先に移住していた家族を追って渡米。明治43オークランドで神学生久布白直勝と結婚。帰国後、大正5より矯風会で廃娼運動と婦人参政権獲得運動を推進。特に〔五銭袋運動〕〔握り飯一個運動〕などを発案し、少額寄付による大衆参加を重視した。戦後平和運動に活躍。平塚らいてう等がつくった〔ベトナム話し合いの会〕に呼びかけ人として加わり、在日米兵などへ反戦カードを送る運動をすすめた。展示書簡のうち一通は、明治43年4月7日付 アメリカシアトルより徳富一敬・久子に宛てたもので、新婚生活を無事に過ごしている様子を伝え、短歌が添えられている。「ほのぼのと山の端白む春の野のかすみの内に小鳥なくなり」大正22年1月1日付ロンドンよりの絵葉書は「ウェストミンスターの大寺院 古代の王侯からはじめて近代の政治家、詩人、伝道者、無名の兵士まで神を礼拝する時に共に在ると云ふこの偉大な国民教育の形を見て感に打たれました。歴史も芸術も日夜国民に親しませる事は何と云ふ大きな事でせう 叔父さんの修史の御本業に一層敬意と感謝を深くしました。」とある。	アメリカ
黒 田 清 輝 1通	1866～1924 慶応2～大正13 鹿児島県	日本近代洋画の父。東京外国語学校に入学、フランス語を修め、明治17法律研究のためフランスに留学。明治21洋画の研究に転じラファエル・コランに師事。在仏中サロンに出品し入選。明治26帰国、後進にフランス流の美術教育をする。明治29白馬会を結成。東京美術学校西洋画科の指導者となる。明治33～34再度渡仏。明治40文展の創設。大正8帝国美術の創立に尽力。大正11森鷗外の後任として第二代院長をつとめた。大正9貴族院議員となり政治や国際文化交流に貢献。代表作『読書』『湖畔』『不如帰』主人公浪子の肖像を描く。	フランス
古 在 由 直 1通	1864～1934 元治1～昭和9 京都	明治・大正期の農芸化学者。東大総長。明治23東大農科大学助教授となり、農芸化学を担当。翌年足尾銅山の鉍毒分析を開始。明治25自由民権運動家で小説家の清水とよ(紫琴)(1867-1933)と結婚。明治28から5年余ドイツその他に留学。帰国後、明治32農科大学教授。明治35足尾鉍毒調査委員として栃木、群馬に出張。精密な土壌分析をおこない被害農民の主張の正しさを立証。日米友好の印として有名なワシントンボトマックの桜は一度虫がついて焼却処分になった経験から、古在らの調査により、病気や害虫の付く恐れのない苗が選ばれた。	ドイツ
古 開 茂 一郎 2通		ワシントンシアトルから胸にTのマークが入ったユニホームを着た野球選手達の絵葉書(大正1年8月1日)	アメリカ

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
小西 増太郎 2通	1862～1940 文久2～昭和15 広島県	神学者。翻訳者。キリシタン大名の小西行長の子孫。明治19ニコライ神学校を卒業し、ロシア公使西徳二郎に随行してロシアに留学。明治24モスクワ大学で心理学・哲学を学んだ。日本で最初にトルストイに会った人。明治25トルストイのもとで老子の「道德経」を露訳し、ロシアの学術雑誌に掲載された。明治29年10月8日、蘇峰は小西増太郎の紹介状を持って、トルストイ宅を訪問した。家族と食事をするが、その際トルストイから小型のロシア語聖書を小西増太郎に渡すよう頼まれた。蘇峰はトルストイ亡き後、来日した三女アレキサンドと面会する約束であったが、アレキサンドが風邪を引いたため実現しなかった。小西の著書「トルストイを語る」は岩波書店から出版された。	ロシア
齊藤 実 7通	1858～1936 安政5～昭和11 岩手県	明治・大正・昭和期の海軍軍人。政治家。明治17アメリカ留学。米公使館付武官兼務。第一次西園寺内閣の海相。大正3、3・1独立運動勃発直後の朝鮮総督として赴任。武断政治から文化政治への転換をはかった。昭和2ジュネーブ軍縮会議全権委員。昭和7、5・15事件後挙国一致内閣を組織したが、右翼の内閣の反感を買って総辞職。2・26事件で殺された。高野長英・後藤新平は同じ郷里水沢出身。	アメリカ
柴 五郎 1通	1859～1945 安政6～昭和2 福島県	明治・大正・昭和期の陸軍軍人(大将)。柴佐多蔵の子。柴四朗(東海散士)の弟。陸士卒業。日清戦争時は、大本営参謀として出征。明治28イギリス公使館付。帰国後清国公使館付となり義和団事件に際し北京の公使館に籠城した。日露戦争は野砲兵第15連隊長として出征した。大正7東京衛戍総督に就任。明治39金鷲勲章受賞	イギリス
島地 黙雷 (雨田) 1通	1838～1911 天保9～明治44 山口県	真宗本願寺派僧侶。明治5本山の西本願寺から海外の宗教事情を視察する為、ヨーロッパに派遣される。先進諸国で「政教分離」や「信教の自由」が保証されている事情を見て後、外遊先から政府教部省に対して神道国教化の根本理念となっていた「三条教則」を批判した「三条教則批判建白書」を提出。欧州の帰りエルサレムに立ち寄ったあと、明治6積尊の聖地を礼拝。インドの仏跡を訪ねた最初の日本人。帰国後世界的な視野に立って日本仏教界の近代化に努めた。「新聞雑誌」「報四叢談」を発行し、白蓮社・女子文芸学舎を経営した。	ヨーロッパ インド
田中館 愛橘 1通	1856～1952 安政3～昭和27 陸奥国(岩手県)	日本の近代化学、特に物理学、地球物理学、航空学の創始者。日本式ローマ字の提唱者。明治21イギリスに留学。グラスゴー大学でW.トムソンに師事。明治23ベルリン大学に転じる。帰国後、昭和19文化勲章。ローマ字運動をおこし、早くからタイプライターを愛用した。研究は、電磁気の精密測定法、地球物理学、航空と広い分野にわたる。一貫して基礎研究重視の姿勢を貫いた。各種国際学術組織の重要メンバーとして、科学者たちの国際交流に大きく貢献した。(田中館愛橘記念科学館ホームページ参照) 〈展示書簡〉「ITIKOO KI' NENKAI no OMIYAGE」Rōmazi Sekai 昭和17年8月号抄刷 「Hitorino Ningen mo hitotuno Kokka mo, sono sizumiyuku Mitiyuki ni Tigai wa nai. Igrisu no EDWARD VIII-sei ga Prince of Wales no toki myōna Mi-zukuroi o sita.	イギリス ドイツ アメリカ
東海 散士 (柴四朗) 1通	1852～1922 嘉永5～大正11 千葉県	明治時代の政治家・小説家。本名柴四朗。明治11渡米、ハーバード大とペンシルベニア大で経済学を学び、明治18帰国して政治小説「佳人之奇遇」初篇を刊行し好評を博した。19世紀世界の小国出身者たちが抱く自由と独立への激しい憧憬、それらを通して日本の危機を訴える作者の熱情が、漢詩と漢文くずしの文体で描かれ、当時の知識青年の心を強くとらえた。好評にこたえて明治19～30に8篇まで断続しつつ書き継がれた。欧化主義を排し国権伸張を主張した。明治28の総選挙で当選して以来衆院議員(憲政本党)として活躍した。柴五郎・陸軍大将は弟。	アメリカ



氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
永井 潜 4通	1876~1957 明治9~昭和32 広島県	生理学者。明治36から英独仏留学。ドイツのゲッチンゲン大学で生理学者フェルヴォルンに師事し冬眠動物の代謝生理を研究。戦後の産児制限の普及と性倫理の激変に危機感を覚え、優生学の立場から性教育と性科学の啓蒙に力を入れた。「産む性」としての地位確立のために、女性自身が積極的に活動するのを奨励した。	ドイツ イギリス フランス
長井 長義 1通	1845~1929 弘化2~昭和4 阿波国(徳島県)	明治・大正の薬学界で活躍した有機化学者。徳島藩医長井琳草の長男。長崎の精得館でオランダ医のボードウィンに化学、マンスフェルトに臨床医学を学ぶ。明治2上京し東大医学部に入学。明治4第1回海外留学生としてドイツ留学。ベルリン大学のホフマンに師事して有機化学を専攻。明治17帰国。大日本製薬社長。東京大学教授。内務省衛生局東京試験所所長を兼任。東京化学会会長。日本薬学会会頭。明治34には日本女子大学の創立に尽力し、化学を講義。エフェドリン(喘息の治療薬)の発見をはじめ数々の研究業績をのこした。夫人のテレゼは良妻賢母で、日独親善、女子教育に尽力した。	ドイツ
長岡 半太郎 1通	1865~1950 慶應1~昭和25 肥前(長崎)	明治・大正・昭和期の物理学者。日本の理論・実験物理学の育ての親。大村藩士長岡忠利の子。小学校を落第。明治26磁気歪現象の研究で理学博士。同年ドイツへ留学。明治29帰国。帝国大学教授となり、本多光太郎ら多数の物理学者を育てる。明治33第一回国際物理学会(パリ)に招待され“磁歪”について講演した。	ドイツ フランス
長与 又郎 (霞山) 1通	1878~1941 明治11~昭和16 東京	明治・大正・昭和期の医学者。長与専斎(医学者)の三男。長与善郎(小説家)の兄。東大卒業後、ドイツのフライブルグ大学留学。帰国後東大医学部長となる。また伝染病研究所・癌研究所などの所長をつとめた。心臓および肝臓の権威として知られた。昭和9~13東大総長。漱石の解剖をした医師。	ヨーロッパ インド
西村 天因 (時彦) 1通	1865~1941 慶応1~大正13 鹿児島県種子島	明治・大正期のジャーナリスト・文学者。鉄砲伝来のポルトガル船に乗っていた明人と砂上で筆談した祖先がいる。重野安禪、島田篁村に学び、風刺小説「肩屋の籠」を発表。明治23「大阪朝日新聞」入社。漢学を基礎に健筆を振る。朝日のコラム「天声人語」の名付け親。明治25福島安正が単身馬でベルリンからシベリア横断する冒険旅行を成功させた時、他社に先駆けてウラジオストックに向かい独占取材した。明治43世界一周旅行に特派された。明治天皇崩御の際に天因の書いた「哀辞」は、同じ朝日の内藤湖南を「一代の名文」と感嘆させたという。晩年は漢学者として京大などに出講した。(展示書簡)華翰披瀟後小包昨日到達、御願致置候天問天対解一冊被許借覧難有奉謝し候 誠以希觀之珍本先親為快申候 家藏景宋抄本と対校能書候(大正9年9月22日付)	イギリス ドイツ アメリカ
鳩山 和夫 2通	1856~1911 安政3~明治44 東京	明治期の政治家・弁護士・法学者。開成学校(東大)卒。コロンビア大学・エール大学に留学。早稲田大学総長。鳩山一郎の父。明治34年母校エール大学創立200年記念祝賀式に招待され、たいまつ行列の日本人の一団の先頭にたち水色のガウンを着て行進した。	アメリカ
鳩山 春子 4通	1861~1938 文久1~昭和13 長野県	女子教育者。明治7竹橋女学校入学、同校廃校後東京女子師範学校へ移り英語科及び師範科本科卒業。明治14母校の教員となり、米留学帰りの法律学士鳩山和夫と結婚し、政界や社交界で活躍。近代的良妻賢母として長男一郎を政治家、次男秀夫を帝大教授に育て上げる。明治19共立女子職業学校、設立発起人となる。	アメリカ

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
林 権助 3通 <small>こんすけ</small>	1860～1939 万延1～昭和14 会津	明治・大正期の外交官。東大卒。明治32韓国公使に赴任。対韓経略の第一線で朝鮮の植民地化を推進。当時桂太郎、小村寿太郎と並ぶ「朝鮮三人男」の1人と称された。明治41イタリア大使として渡欧したが大正5北京公使に復し大正8からは関東長官となり、中国北方軍閥援助に奔走。大正9駐英大使をつとめ退官後再渡英して留学中の秩父官雍仁親王の補導に当たる。昭和9から枢密顧問官となった。 〈展示書簡〉イギリスに滞在していた外遊中の蘇峰へ宛てたもの「御病気の趣拝承仕居候」と見舞い方々、女王陛下在位60年の御祝いに有栖川親王が渡米したこと、「山縣・伊藤侯が御出相の際は直に帰朝の覚悟あり」と書いている。	韓国 中国 イタリア
原田 助 10通 <small>たすく</small>	1863～1940 文久3～昭和15 熊本県	明治期後半大正期にかけて国際的に活躍したキリスト者。同志社神学科卒。明治21渡米。シカゴ神学校、ユール大学留学。同志社第7代総長日本人キリスト者として国際的に高い評価を得、エジンバラ大学、アーモスト大学から名誉博士の称号を贈られる。イギリス・アメリカ・中国などへ講演旅行に出かける。ロシア旅行ではトルストイを訪問し、国際平和について意見を交わした。その時トルストイから原田が貰い受けた杖が後に蘇峰の手を経て同志社に寄贈された。 〈展示書簡〉先生の伝記編纂の大任ハ必ス大兄之ニ当リ玉フベシト信ジ居候処国民之友ニ御告白ノ一言を拝読シ大ニ安心仕候。新島襄の死去に際しての海外新聞の切りぬき(3紙分)を同封(明治23年3月5日付アメリカニューヘブーンより)	イギリス アメリカ 中国 ロシア
兵藤 秀子 (前畑) 4通	1914～1995 大正3～平成7 和歌山県	昭和期の水泳選手。昭和4女子選手として初めてハワイへ遠征。第10回オリンピック(ロスアンゼルス)に参加。200m平泳ぎで2位となる。第11回オリンピック(ベルリン)は国連を脱退し孤立を深めていた日本も、この大会を「日本の国力」を示す絶好の機会ととらえ、選手たちは「国家」の重圧を背負わされた。200m平泳ぎでドイツのゲネゲルと大接戦の末、僅差で優勝した(タイム3分3秒6)実況中継での河西アナウンサーの「前畑がんばれ」は有名。	ロスアンゼルス ベルリン
福島 安正 27通 <small>やすまさ</small>	1852～1919 嘉永5～大正8 信濃(長野県)	明治時代の陸軍軍人。慶応1江戸でオランダ式兵法を学び、維新後大学南校に学ぶ。明治6司法省に入り、翌年陸軍省に移った。中国・朝鮮関係の官職を経て、明治20ドイツ駐在武官としてベルリンに赴任。英仏独露語に通じたエリート。明治25帰国に際し、乗馬で1年2カ月かけてウクライナの原野とシベリアの森林地帯数千キロを横断。日清戦争では対韓強硬論を唱え、義和団事件では派遣軍司令官として活躍。明治39金鷲勲章受賞	ドイツ ロシア シベリア
本多 熊太郎 14通	1874～1948 明治7～昭和23 和歌山県	明治・大正・昭和の外交官。韓・清各国に在勤後、明治34小村外相の秘書官をつとめてポーツマス講和会議に随行。小村外交信念に強く影響される。その後ハルビン総領事、英大使館参事官、スイス・オーストリア・ハンガリー各国公使。大正13ドイツ大使。退官後は〈幣原軟弱外交〉非難の論陣を張り、国本社などの国家主義団体に関係。昭和15松岡外相の囑託で南京に中国大使として赴任。著書「魂の外交」1941 〈展示書簡〉伊国政変に関スル御高諭を敬読。国民の一人として感謝の至。伊国民に対する警策たるに止らずと襟を正して敬読仕候事(明治□年8月25日付)	中国 イギリス スイス オーストリア ハンガリー ドイツ
本多 静六 4通	1866～1952 慶応2～昭和27 埼玉県	日本初の林学博士。一橋家家臣柳原氏の子。彰義隊幹事本多晋の養子。東大、ミュンヘン大卒。ミュンヘン大で国家経済学博士号を得、東大教授となり林学を講じる。日比谷公園設計。帝国森林会、日本庭園協会設立。「赤松亡国論」は著名。 〈展示書簡〉「森林治水事業促進座談会開催ノ要領」同封 座談会主催者：森林治水事業全国期成同盟会 日時：昭和26年9月5・6日 会長：上山満之進 列席者：本多静六 徳富蘇峰 長谷川如是閑 下村宏 岡実 鉄道省 電気界 有力者「特ニ徳富蘇峰氏ニハ我国思想言論界ニ於ケル治水治山ノ根本義ヲ説述朝野ニ与ヘラレタル警告ハ一般ノ猛省ト考慮トヲ促カサレタル点甚ク大ナルモト思料セラレ此際何分ノ御線合ヲ得テ御列席ヲ願ヒ度キ存念ナリ」とある。	ドイツ

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
本多 庸一 8通	1848～1912 嘉永1～明治45 陸奥(青森県)	明治時代のキリスト教指導者。横浜のブラウン塾やパラ塾に学び、明治5パラ一より洗礼を受ける。東北地方伝道を志し、東奥義塾を再興し弘前公会創立。明治23アメリカに留学。その後青山学院院長となる。明治30日本メソジスト教会初代監督。征清軍慰問使として戦地に渡り、戦争に協力。日露戦争では内村鑑三・柏木義田らが反戦論を唱えたのに対し主戦論を主張。	アメリカ
前田河廣一郎 2通	1888～1957 明治21～昭和32 宮城県	大正・昭和期の小説家・評論家。明治38上京し、蘆花に師事。その援助で渡米。労働しながら社会主義運動者たちを知り、英文の小説を発表した。大正9帰国後雑誌「中外」の編集に従事。大正10同誌に「三等船客」を発表し、注目を集めた。「種蒔く人」「文芸戦線」同人として盛んに小説を発表。評論家としては痛烈な文壇批判をし、プロレタリア作家として活躍した。 〈展示書簡〉「蘆花伝」の執筆終了し、書肆に引渡した 蘇峰先生と故蘆花先生とは御同胞だけありて、交渉交錯実には微妙なる陰影を曳いて殆ど御一体の感を催すエポークあり 故蘆花先生は自ら云われし如く「故郷の山のように胸にぶっつかせて下さった」兄上たる蘇峰先生に負ふところ多大なるを痛感いたしましたして……(昭和13年2月2日付)	アメリカ
正岡 猶一 (芸陽)1通	広島県	評論家。「大阪日報」主筆。青山学院卒。キリスト教の布教活動。文芸雑誌「新声」同人。展示書簡はサンフランシスコからの絵葉書(大正4年5月14日付)	アメリカ
松井 彰 6通		東京日日新聞社。プタベスト・フランクフルト・パリからの絵葉書(昭和7年7月2・14日 8月2日付)	ヨーロッパ
松岡 富雄 27通	生1870 熊本県	台湾新聞社社長。〈展示書簡〉ミンダナオ島から島では典型的な高床・わらぶきの住居の絵葉書(大正2年7月13日付)	フィリピン
松岡 洋右 12通	1880～1946 明治13～昭和21 山口県	大正・昭和期の外交官・政治家。近衛内閣外相。日独伊三国同盟を推進、A級戦犯。開戦3日後昭和16年12月11日付の蘇峰宛の書簡では開戦の理由として「米国をよく理解できなかった日本政府の外交上の失敗」であることを指摘。その外交が第2次近衛内閣にも理解されず、自分が失脚したことへの無念さを訴えている。しかし「開戦したからにはその外交のしくじりを反省し、日英米の国交処理を何時かはしなげなければならない」と書き送っている。 〈展示書簡〉迂生、不相変尚病余の衰弱、何の役にも不立、唯日々皇国の危険を目の前に、憂を深ふ致候而已に御座候…小生も 尚一二年ハテも活動は出来間敷候 若夫御下間の事の如きは、も早人間の智慧や才覚には不変、人類の歴史上かかる大事変は百万年間度々有たるべく、而して独が参るか、我亦減ぶるか神以外判らず(昭和19年8月23日付)	アメリカ ヨーロッパ
松尾 小三郎 7通	生1873 大分県	日本海事組合常務理事。大正期に「資本的表日本と民衆的裏日本」論を唱えた。著書「孤島の自覚日本海中心論」(1922年)など。松尾小三郎の「日本海中心論」は、日本海側の劣性挽回のため対岸諸国との共生を強く主張している。展示書簡は明治44年2月～8月にかけてヨーロッパ各地からの絵葉書6通	ヨーロッパ各地
松野 頭次郎 1通		ペルー・リマより12名乗りの乗用プロペラ機の絵葉書(昭和9年5月21日付)	ペルー
松方 幸次郎 4通	1865～1950 慶応1～昭和25 薩摩(鹿児島県)	明治・大正・昭和期の実業家・美術蒐集家。松方正義の三男。東京帝大を中退。明治17渡米。エール大学に学び、のちソルボンヌ大学に学習。実業家として最も活躍したのは、川崎造船社長時代であり、その活動範囲は国際的に極めて広がった。大正期にヨーロッパ近代絵画を中心とする世界有数の大コレクションを作り上げ、東京に共済美術館を設立し、日本で西洋の美術作品を見る機会を提供しようとしたが、昭和2年の経済恐慌によって設計図もできていながら実現しなかった。現在国立西洋美術館に所蔵されている「松方コレクション」は第二次世界大戦当時フランスに残され、サンフランシスコ講和条約によって一旦フランスの国有財産となった後、日本に寄贈返還されたもの。	ヨーロッパ

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡航先
真鍋 嘉一郎 2通	1878～1941 明治11～昭和16 愛媛県	<p>医学者。東京帝国大学教授。愛媛県松山高等学校で夏目漱石に学び、第一高等学校を経て東京帝国大学医科大学を卒業。内科学で理学療法研究のため3年間ドイツに留学し、帰国後物療内科という新分野を開拓。夏目漱石、浜口雄幸などの著名人の主治医をつとめる。真鍋は温泉療法の草分け的存在で、明治37東北の飯坂温泉成分に「ラジウム」が含まれていることを学会で発表。日本で最初にラジウムを発見した。</p> <p>〈展示書簡〉小生は中学生時代より先生の御記録を拝見致し 不少自己の修養を資し就中「結婚の相手を探すは親の敵を捜すよりも六かしい云々」のご警告は「静思余録」の中に拝読いたし 中学時代より印象深く相覚え仕申候」(昭和14年3月26日付)</p>	ドイツ
間宮 英宗 1通	1871～1945 明治4～昭和20 愛知県	<p>御殿場青龍寺住職(青龍寺は富士山が好きだった蘇峰が分骨を願った寺)。上海で客死。展示書簡は釈宗演と連名の京城からののがき</p>	中国
三島 海雲 5通	1878～1974 明治11～昭和49 大阪	<p>カルピスの創業者。大阪西本願寺派教学寺住職の長男。西本願寺文学寮(のちの仏教大学)に学ぶ。大谷光瑞の弟子。明治35年中国大陸に、無限の可能性と夢を求めて渡り、さまざまな事業を試みた。モンゴルで、当地の遊牧民たちが毎日のように飲んでいた乳酸菌で発酵させた“酸乳”と出会う。大正4中国での事業を手放して帰国。大正8モンゴルの“酸乳”をヒントに世界初の乳酸菌飲料「カルピス」を売り出す。「カルピス」の名前はカルシウムとサンスクリット語で「醍醐味」を意味するサルピスマンダを合成したものの。</p>	モンゴル
美濃部 達吉 1通	1873～1948 明治6～昭和23 兵庫県	<p>明治・大正・昭和期の憲法学者。東大卒。比較法制史研究のためヨーロッパに留学。明治32東大教授。比較法制史(のち憲法)を担当。明治38文部省の人事介入に抗議して「権力ノ濫用ト之ニ対スル反抗」という一文を書く。大正1「憲法講和」を著す。上杉慎吉らの天皇主権説に対して天皇機関説を唱えて、美濃部・上杉論争が起こる。昭和5ロンドン条約をめぐる統帥権問題について進言。ファシズムの進行とともに美濃部憲法は国体に反するものとして攻撃される。昭和10貴院における菊地武夫の排撃演説を口火に機関説問題は政治問題となり、不敬罪として告発され著書は発禁となった。戦後の憲法改正では、憲法問題調査会顧問として参加。昭和21枢密顧問官として日本国憲法の草案審議にたずさわった。息子亮吉は東京都知事を三期つとめた。</p>	ヨーロッパ
宮川 経輝 (蘇漢) 3通	1857～1936 安政4～昭和11 熊本県	<p>明治・大正・昭和期の牧師。祖父経輔は本居宣長門下の国学者。明治5、16歳のとき洋学を志し熊本洋学校入学。一年上級が横井時雄、小崎弘道、同級に海老名弾正がいる。明治9花岡山の奉教結盟での趣意書35名の連署の筆頭第一に署名。同志社神学校入学。教界では大雄弁家といわれる。大阪中之島に泰西学館を設立し校長となる。梅花女学校校長もつとめる。明治32海外宗教事情視察のため外遊。カナダ、アメリカ、英国、欧州をめぐる。日本組合教会会長。小崎弘道・海老名弾正とともに三長老として敬慕される。墓は恩師新島襄の墓の近くに建っている。</p> <p>〈展示書簡〉「南部に於て開かれたる組合教会之教役者会ハ非常之満足と感動とを以て結了致し新なる靈の力ニ満たされこの沈睡したる社会ニ立ちて靈的運動之中心たらん事を期し、その任地ニ向ひ申候而して同大会に於ては教役者会なるものを組織し我組合教会ニ属する百数十名のものハ一団塊となりて活動し…」と始まり「罪惡を悔改し基督ニ依りて天父ニ帰順すべき事」「人は皆神の子なれば愛隣の大義を全うすべき事」「一夫一婦の倫を保ちて家庭を潔め父子兄弟の道を尽すべき事」「国家を抱興して人類の幸福を増進すべき事」「永生の望ハ信と義とによりて完うせらるる事」の五カ条の「綱領ニ従ひて福音を宣伝し神の国を建設せんことを決す」と述べ、最後に「甚だ恐れ入り候えども国民新聞を以て世上の御発表を成下存じ候」と結ぶ。(明治28年10月26日付)</p>	カナダ アメリカ イギリス ヨーロッパ

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡航先
村井 知至 10通	1861～1944 文久1～昭和19 愛媛県	明治時代のキリスト教社会主義者。商人を志して上京し、三菱商業学校に学ぶ。中退して横浜の商業貿易を学ぶ。宣教師パーの英語塾で学び、友人の勧めで同志社英語学校に入学。新島襄の影響を受け、明治22年渡米。アンドーバー神学校に学ぶ。この地で成瀬仁蔵と出会い、寝食を共にし勉強に励んだ。日清戦争の後再度渡米しアイオワ大学で社会学を学ぶ。帰国後の明治31片山潜、安倍磯雄らと社会主義研究会を組織。ユニテリアン教会の説教者となる。「六合雑誌」に多くの論文を発表。第一英語学校の創立。英語学習書を著す。のち松村介石の日本教会に。さらに独自の道を歩んだ。「日本女子大学学園事典」参照 (展示書簡)私の親友で藤田○斉と申す者あり「百まで生きて働く人の会」なるものを創設したい…吾が百歳会の名誉会長になって戴き先生の御指導を仰ぎたい(昭和16年2月13日付)	アメリカ
村田 勤 (素軒) 34通	1866～1945 慶応2～昭和20 三重県	教育者。父からキリスト教の感化を受けて、明治15同志社英学校に入学。新島襄に師事。明治17受洗。同志社卒業後、熊本英語学校、同志社の教師をつとめる。明治34エール大学留学。M.A.を得て帰国。エール大学では、同志社の後輩森次太郎と出会う。日本のプロテスタント草創期宗教改革者としても知られている。徳富蘆花が生涯を通じて最も許しあった友人の一人。日本女子大で明治37-44西洋史を教えた。蘇峰への書簡(昭和18年2月22日付)で「同志社時代の御追憶誠に面白く拝見致し候ししかし此の種の文章に於ては健次郎氏の優越を甚だ失礼ながら認めざるをえない」と伝えている。蘆花の愛子夫人が「蘆花日記」を整理し、出版することに協力した。 (展示書簡)改造所蔵の先生と大江逸君の対話を面白く拝読しました。これは先生の自問自答と考へます。昔大江逸は先生の号でありますやうに覚えています。(昭和19年4月12日付)	アメリカ
森永 太郎 3通	1865～1937 慶応1～昭和12 佐賀県	大正・昭和期の実業家。6歳で父を亡くし、母親は再婚、親せきの間を転々とする。九谷焼の貿易商の店員として焼き物販売のため渡米。アメリカで洋菓子の製造技術を学んで帰国し、明治32東京の赤坂に森永西洋菓子製造所を開業。明治38に「エンゼルマーク」を商標として登録。明治43森永商店設立。大正元年森永製菓に改称。大正3にポケット用ミルクキャラメルを発売、爆発的な人気を博した。大正5日本初の板チョコ発売。大正8わが国で初めて工場従業員の労働時間を1日8時間制とする。大正10日本最初の育児用粉乳発売。引退後伝道活動に入る。 (展示書簡)「昨夕刊「風袋乎実力乎」は小生近来に於いて乍失礼最も我が意を得たるものに御座候、日本の為めには適切な金言故小生の記憶より取り去られなしと信じ候(中略)日本は人爵に重きを置くから世界の趨勢より遠ざかりつつある 換言すれば頭が古くなりつつある」(大正13年2月11日付森永製菓の便箋4枚)	アメリカ
八木 秀次 1通	1886～1976 明治19～昭和51 大阪	日本電波工学の先駆者。大正3から3年間電気工学研究のためドイツ、イギリス、アメリカに留学。ドイツでは著名な電波工学者バルクハウゼン、イギリスでは真空管の発明者フレミングに師事、大正14電波指向方式の「八木アンテナ」を発明。広くテレビ受信用、各種無線用に利用された。大阪帝国大学創設にあたり、理工学部物理学科の初代主任教授となり、講師だった湯川秀樹の量子力学研究を庇護。日本人初のノーベル物理学賞へと導いた。昭和31文化勲章。留学中、ドイツでは労働運動を研究。イギリスではフェビアン主義(社会主義運動)に共鳴し、無償でイギリス人に日本語を教えた。大英博物館東洋絵画部職員アーサー＝ウェーラーは八木から習った日本語をもとに独学を続け、1952年から10年がかりで「源氏物語」を英語で翻訳出版し、一躍世界に知られた(田中館愛橘記念科学館ホームページ参照)。 (展示書簡)(印刷)「政治に純粋性と科学性を与え、科学に正しい政治性を確保すべく共同の研究と共同の戦いを展開しようとするものであります」代表者 八木秀次 三輪寿社 松前重義「科学と政治の会」創立の趣意書・入会申込書・発起人同封(昭和25年12月)	ドイツ イギリス アメリカ

氏名(号) (蘇峰宛書簡致)	生没年・出身地	解 説	渡航先
安井 曾太郎 1通	1888～1955 明治21～昭和30 京都	大正・昭和期の洋画家、明治40渡仏。アカデミー・ジュリアンに入る。大正3帰国。湯河原に画室をかまえる、日本美術家連盟初代会長。 〈展示書簡〉先日は兩人にてお邪魔仕り色々おもてなしに預り大変喜び申上候 お陰お灸其の後調子頗るよろしく大喜びに候 御好意難有御礼申上候 愚妻よりもよろしく申居り候 (昭和25年2月8日付 湯河原天野屋別荘より)	フランス
安場 保和 11通	1836～1899 天保7～明治32 熊本県	政治家。嘉悦氏房、山田武雨と並び横井小楠門下の秀才のひとり。明治元年江戸城明け渡しの軍艦に参加、明治4熊本藩権大参事となり、藩政改革、廃藩置県の二大事業をやりとげる。大久保利通の抜擢で大蔵大丞粗税頭。潔癖一徹な性格は大隈重信・陸奥宗光と意見があわず辞職。岩倉欧米漫遊に大蔵理事として同行。帰朝後福島県令となり産業の振興をはかり製糸場、産馬会社創設、病院建設その他交通機関の開発、教育事業の普及に実績をあげた。その後愛知県令に転じ、水利交通に実績をあげた。福島県令時代には九州鉄道を創設。門司築港、筑後川の改修工事など大きな事業をやりとげた。文は横井小楠、武は宮本武蔵に範をとった、明治憲法制定にあたっては元田永孚、井上毅らと志しを同じにし国体の上にあるべきと主張した。次女和子を内務省衛生局勤務の後藤新平に嫁がせた。	アメリカ
吉田 初三郎 36通	1884～1955 明治17～昭和30 京都	画家。友禪の図案工などを経て、洋画家を目指して関西美術院長の鹿子木孟郎に弟子入り。「大画家が広告も描くフランスのように、民衆のための芸術を仕事としてはどうか」という師のすすめもあり商業画家に転じる。大正後期から昭和前期の鉄道網の発達に伴い、全国各地の観光案内地図を作成、その数は500種以上に及ぶ。左右の端をU字型に曲げ、実際には見えない遠景をパノラマ風に描き込んだ画法で知られ、「初三郎式鳥略図」などとよばれた。大正2京阪電車の依頼で作製した沿線案内図「京阪電車御案内」が、翌年に学習院普通科の修学旅行で京阪電車に乗車した皇太子(後の昭和天皇)に「これはきれいでわかりやすい」と賞賛された。昭和13、14従軍画家として、大陸へ、戦略用鳥略図を描く。地図のみならず、絵はがき、ポスター、カレンダーなど、その仕事は多くの商業美術にわたる。また、助手との共同作業による工房制など、商業美術の先鞭をつけた(広報犬山「大正の広重」のパノラマ画を楽しもう参照) 記念館所蔵の吉田初三郎画「阿蘇周辺」には遠く富士山、ハワイ、香港、サンフランシスコまで描き込んだみごとな作品。水俣の蘇峰ゆかりの地を描いた巻絵「水俣小景」も展示。	中国
和田 英作 1通	1874～1959 明治7～昭和34 鹿児島県	明治・大正・昭和期の洋画家。東京美術学校。原田直次郎、黒田清輝に学ぶ。明治33渡仏してコランに師事、明治36帰国。東京美術学校校長。昭和18文化勲章受賞。 〈展示書簡〉明治29年蘇峰・深井英五外遊の壮行会出欠の返信葉書。世話人巖本善治・島田三郎宛(明治29年5月15日付)	フランス
ハンナ・リデル 2通	1855～1932 安政2～昭和7 イギリス	明治22年34歳の時、CMS宣教師として来日、熊本の第5高等学校の英語教師として働いた。後に、ハンセン病者救済に生涯の使命を感じ、明治28母国イギリスをはじめ、日本国内の有志等へも働きかけ熊本回春病院を開院した。展示書簡は、蘇峰の援助に対し感謝する内容の大正5年2月17日付のもの。	イギリスより 日本へ

平成14年度から引き続き展示している書簡（詳しくは目録19を参照）

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
青木 文教 12通	1886～1956 明治19～昭和31 滋賀県	大正・昭和期のチベット学者。法主大谷尊由に派遣され、明治45～大正5にかけて、グライ＝ラマ13世の弟子としてチベットに滞在。チベット語学・歴史・文化一般を研究。	インド チベット
朝河 貫一 10通	1873～1948 明治6～昭和23 福島県	歴史家。アメリカに渡り、エール大学大学院で学ぶ。明治39からエール大学で教鞭をとり、36年間にわたり日本史とヨーロッパ中世制度史を論じ、エール大学名誉教授となる。	アメリカ
安倍 能成 1通	1883～1966 明治16～昭和41 愛媛県	教育者・哲学者。カント哲学を研究。野上豊一郎・小宮豊隆らとともに夏目漱石の門下。大正13ヨーロッパ留学。昭和21文相となる。学習院院長。	ヨーロッパ
大西 祝 26通	1864～1900 元治1～明治33 岡山県	哲学者。同志社・東大卒。「六合雑誌」の編集。東京専門学校で教鞭をとり、論理学、心理学、倫理学、美学、西洋哲学史等の哲学部門を担当。明治31文部省よりドイツ留学。	ドイツ
岡倉 天心 4通	1862～1913 文久2～大正2 横浜	美術行政家・思想家。東大卒。古美術の保護、美術の普及、美術教育調査にあたる。日本および東洋の文化・芸術的優秀性を内外にうったえた。	アメリカ
川上 音二郎 1通	1864～1911 元治1～明治44 福岡県	新派劇の俳優。オペケベアー節で人気を得た。川上貞奴は妻。展示中のイギリスよりの絵はがきには「王室から2千円いただいた」と報告しているロンドンからの絵葉書	欧米
後藤 新平 47通	1857～1929 安政4～昭和4 岩手県	政治家。明治23医学研究でドイツ留学。内務省衛生局長。台湾総督民生局長。大正8外遊。米国、フランス、ドイツ、ロシアを巡る。明治39滿州鉄道初代総裁。東京市長。	ドイツ・アメリカ ロシア フランス
島田 清次郎 9通	1899～1930 明治32～昭和5 石川県	小説家。長編小説「地上」がベストセラーになる。大正11「地上」の印税で世界漫遊に出かける。傲慢な態度が世間の非難を受け、最後は保嬰院で病死。	イギリス・アメリカ ドイツ・イタリア 他
釈 宗演 41通	1859～1919 安政6～大正8 福井県	禅僧（臨済宗）。明治11鎌倉円覚寺の今北洪川に参じる。明治18慶応義塾で学び、福沢諭吉のすすめでセイロンに渡航。シカゴの万国宗教大会に日本仏教者を代表して参加して講演。明治38再び渡米。欧州各地を周遊。この時鈴木大拙が通訳をつとめる。	セイロン (スリランカ) アメリカ 欧州
杉村 楚人冠 (本名広太郎) 9通	1872～1945 明治5～昭和20 和歌山県	明治・大正期のジャーナリスト。通訳・翻訳に従事。「国民新聞」の英文翻訳。東京朝日新聞社に入社。明治37～38にイギリス特派。校正係の石川啄木の才能を認め彼を選者に「朝日歌壇」を設けた。夏目漱石、釈宗演とも交遊。	イギリス
鈴木 大拙 1通	1870～1966 明治9～昭和41 石川県	宗教家。釈宗演の推薦で明治30アメリカに渡り、哲学者ボールケイラスの助手となり、「大乘起信論」を英訳した。禅思想を平明に説いてその普及に努める。昭和11世界宗教会議に日本代表として出席、イギリス、アメリカの諸大学で「禅と日本文化」の講演を行う。	イギリス アメリカ
高木 信威 6通	1872～1935 明治5～昭和10 静岡県	ジャーナリスト・政治学者。明治25より「国民新聞」「国民之友」「静岡新報」「やまと新聞」「中央新聞」などの理事、主筆。「東京日日新聞」の編集局長。大正3～5イギリスに渡る。	イギリス
鶴見 祐輔 7通	1885～1973 明治18～昭和48 岡山県	政治家・著述家。後藤新平の娘婿。鶴見和子・俊輔の父。東大卒。ヨーロッパ・アメリカ・オーストラリア・インド各国の大学等に遊説。大平洋会議に毎回出席。民間外交を推進。	ヨーロッパ・アメリカ オーストラリア インド
徳富 蘆花 146通	1868～1927 明治1～昭和2 熊本県	小説家。蘇峰の5歳年下の弟。兄と同じく同志社に学び、中退。明治31から「国民新聞」に連載した「不如帰」が出世作となる。明治39聖地巡礼の旅でパレスチナからロシアに赴き、トルストイを訪問。明治43「大逆事件」に際し、一高で「謀反論」と題する講演を行った。	ロシア
夏目 漱石 1通	1867～1916 慶応3～大正5 江戸	小説家。東大卒。東京高師、松山中学、五高教授を経て明治33イギリス留学。帰国後一高・東大各講師になる。正岡子規を知って俳句を学ぶ。「ホトギス」などに評論文を発表。明治38から「我輩は猫である」を連載。小説家としての活動を開始する。そのうち、教職を辞して朝日新聞社に入り作家生活をはじめた。優れた門下生を出す。蘇峰が出版した五山版「百人一首」への礼状が蘇峰宛てられた漱石からの一通である。	イギリス
平福 百穂 42通	1877～1933 明治10～昭和8 秋田県	大正・昭和の日本画家。日本美術院の日本理想主義に対抗して写生主義を唱える。アララギ派の歌人。蘇峰は百穂の人柄を好み、よく旅行に同道し、百穂が景色を描き、その横で蘇峰が漢詩を書き、豪華な旅の記録となっている。	パリ イタリア
森田 思軒 (本名文蔵) 90通	1861～1897 文久1～明治30 備中(岡山県)	ジャーナリスト・文学者。慶応義塾卒。報知新聞社長の矢野龍溪に認められ同社入社。明治18中国からヨーロッパを歴遊。「龍動(ロンドン)通信」などを送る。「国民之友」に寄稿。ユーゴーの作品の紹介や翻訳、批評文を発表。明治21蘇峰とともに「文学会」を創設した。	中国 ヨーロッパ
矢嶋 楯子 15通	1833～1925 天保4～大正14 肥後(熊本県)	女子教育者。明治19東京婦人矯風会会長。会頭として廃娼運動に奔走。大正10平和を求める日本婦人1万名の署名を携え、国際軍縮会議に参加。竹崎順子の妹。徳富蘇峰・蘆花兄弟の叔母。	アメリカ
山室 軍平 88通	1872～1940 明治5～昭和15 岡山県	宗教家。同志社神学校卒。明治20上京。印刷工となりキリスト教に入信。苦学して同志社で神学を学び、伝道に入る。明治28英国救世軍の来日を機に従軍。日本救世軍の創設・発展に尽力。	イギリス
吉野 作造 12通	1878～1933 明治11～昭和8 宮城県	政治学者。卒業後、清国(中国)に招かれ、明治42帰国。欧米留学の後、大正3教授。「中央公論」に政治評論を発表。大正5年1月号では「憲法の本義を説いて其の有終の美を済すの途を論ず」は大正デモクラシーに理論的基礎を提供した。	欧米 中国

## 蘇峰堂便り

幼い頃の私にとって、蘇峰堂入口に立つ石碑はフアンタジーランドへの道標だった。祖父・塩崎彦市の住む二宮で過ごした夏休みの思い出は、私の五感にしっかりと刻み込まれ、ことあるごとに蘇ってくる。

蒸し暑さの中に汐の香りを含んだ風の匂いや、梅の古木の幹に抱きついた時のざらざらとした感触、耳の奥に沁みこんでしまいたいような蟬の声……。部屋の四辺に掛けられた蘇峰の筆による篇幅の文字は、夜眠る時には生き物のように額から飛び出して、私の上に降つきそうである。ほのかな光のもとで目を開けるのがとても恐かった。休みの間そばにいてくれた祖父が、徳富蘇峰の秘書であったことなど知る由もなく、当時は色白であつたらとしていた祖父は、心やさしい相撲取りだと子ども心に固く信じていた。

今、こうして祖父を思うとき、大きな柔らかい手で「かしこい、かしこい」と私の頭をなでて褒めてくれた、ぬくもりと感触を印象深く思い出す。この「かしこい」という魔法の言葉が聞きたくて、私は休みの間ずっと祖父の周りをうろうろしては、何か手伝えることがないかと一生懸命だった。

あの楽しかった夏休みから時は現在に至り、私は勉強しながら記念館の仕事を続けている。研究者の方々が実際の資料に触れ、研究論文をまとめるためそれらの資料と向き合っている姿を見るとき、祖父が残したものの大切にしたことの意味を改めて再確認する。これから私はどれだけその思いを自分の中で理解し、私なりに大切に育てていけるだろうか。心のどこかでまだあの魔法の言葉を持っているのかもしれない。

宮崎松代

宇宙の歴史からみれば、人間の一生は瞬間でしかないだろう。しかし、人類の歴史の中でひとりの一生は、それぞれが長編物語と言えるのではないだろうか。特別展の準備で蘇峰宛の書簡に触れる時、巻紙一通、葉書一通に重さを感じる。時代背景や人との繋がりがから生まれるドラマを想い、人生の輝きをみるからだろう。宇宙の壮大な現象からみれば、ちっぽけな人間の生も、その輝きは負けていない。

人は生まれてくる時代も場所も自分で選ぶことはできない。この21世紀にこの日本に生きていることは、偶然でしかない。「生」そのものが宇宙の神秘の中に存在していると言えよう。

そんなかけがえない生なのに、人間の一生は何と後悔の連続なのだろう。そして、人類の歴史も又多くの後悔を残していると言えないだろうか。後悔は失敗とも置換えられよう。

人生の小さな営みの中でも、歴史の大きな流れの中でも、失敗を認める勇氣と客観的批判力があれば、希望ある未来がもてる筈だ。

特別展の準備をしながら、歴史とそれをつくっていく私たちの責任について考えた。

蘇峰の言う「待五百年之後」が、今より希望のある世界であるように、自分の日常に責任を持ちたい。

壮大な宇宙の歴史もロマンチックだけれど、人間のささやかな生も素敵だ。「未知との遭遇」が共に幸福であることを希う。

和田千枝

## 編集後記

人物の基本的な記述は、「コンサイス日本人名事典」(三省堂・第4版)、「日本人名事典」(平凡社・昭和28年)で調べ、掲載されていない人は別に随筆や評伝にあたりました。

資料の採集にインターネットで調べた職員も助けになりました。海を渡った多くの友を持っていた蘇峰ってどんな人なの、という質問に答が沢山でてきそうです。一通しかない人、五十通の手紙がある人と、いろいろですが、内容の重さは、通数に関係なく、伝わってきます。昨年より茅ヶ崎の古文書を読む会「塵外館」の7名の先輩の方々に、私たち職員3名も参加させていただき、蘇峰宛書簡を月に一度、楽しく読んでいます。

(高野静子・宮崎松代・和田千枝)

平成十五年三月一日発行

編集 高野 静子

発行者 竹 越 起 一

発行所 徳富蘇峰記念塩崎財団

〒三零〇三三神奈川県中郡二宮町二宮六〇五  
TEL 〇四六三一一〇二六六  
FAX 〇四六三一一〇六七七  
ホームページ

http://www.2ocn.ne.jp/~tsoho/  
E-mail: tsoho@peach.ocn.ne.jp